

実践2 「のっばらプロジェクト」

概要 子どもが主体となって、野草を植えたり虫を集めたり園庭にゼロから“のっばら”を創り、自然環境と豊かな関わりを重ねていく実践です。子どもたち一人一人の発見や気づきが、園全体で共有されていきます。

ポイント 0歳児～5歳児までの子どもたちと保育者と保護者が一体となって創り出す“のっばら”での体験からは、多種の生き物をよく観察し興味を深め、自然に感動し、命と向き合い、生き物の生態や自然の摂理など多くの対話的で深い学びを通した、「科学する心」の顕著な育ちが見えてきます。「のっばら図鑑」「のっばらグラム」などの共通のツールにより、活動に保護者も巻き込み、そのことが子どもたちの意識と意欲をも高めています。

世田谷区立希望丘保育園

0歳児～5歳児

事例1：“のっばら”のはじまり

都会の保育園の中でも、子どもたちが自然や四季の変化を感じながら、自由に虫探しや、いろいろな草花に触れ、たくさんの生き物に出合いながら、心が動く体験を存分にしてほしいという職員共通の思いがあった手探りの中、一人一人の子どもをよく観察し、子どもたちが感じる「なんだろう？」というワクワクした気持ちや「また明日も出合いたい、やってみたい」という湧き上がる思いに寄り添うことが大切だと考えた。

- ・どのように**のっばらを作っていくかを子どもたちと話し合い、「種を植える」「虫はどっから捕ってきてのっばらに入れようよ」などの声**があがった。そこで、近くの自然の多い公園に散歩に出かけ、虫を捕まえてくる。虫に興味があり、触ることが得意な子どもたちを中心にゲジゲジやミミズを発見し捕まえ、**捕まえた子どもに「すごい」「どうやって見つけたの？」と注目が集まった**。捕まえた子どもは**「木の周りを掘った方がいい」など、自分なりに見つけたコツを周りの友達に話していた**。園に戻り、ダンゴムシなどの捕まえた虫をのっばらに放す。しかし翌日、前日に放した虫たちを探すが一匹も見当たらなかった。
- ・なぜいなくなったのか、子どもたちに問いかけてみると**「葉っぱが少なくて隠れる所がない」「餌がない」など子どもたちなりに原因を探し、考える姿**があった。そこで、職員と子どもたちと一緒に、虫の好きな野草の種撒きや植え付けを行った。すると、ある日**デントウムシが一匹いることを子どもが発見する、見つけると真っ先に友達や保育者に報告し、喜びを共有していた**。次第に野草が生い茂り、一面が土だった場所のはのっばらと呼べる緑豊かな場所に変化していった。



事例2：「なんでも図鑑」の取り組み

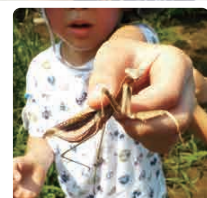
4歳児・5歳児

①「なんでも図鑑」を作っていたい

- ・バケツや虫かごに捕まえた虫をたくさん入れて集めることを楽しんでいた子どもたちだったが、遊びの時間が終わるたびに捕まえた虫を放すことが残念そうだった。
- ・ある時、保育室にあった虫の図鑑に、自分たちで虫図鑑を作っている子どもの様子が記載されていることに気づき**「僕たちもこういうの作りたいなあ」と子どもたちがつぶやく**。そこで、捕まえた虫をのっばらに放す前に写真を撮ることにし、それを紙に貼って集め図鑑を作ることにした。**子どもたちの意見を取り入れ、「虫の名前」「捕まえた日」「誰が捕まえたか」「どこで捕まえたか」などを記載**することとした。
- ・初めは虫を図鑑に載せることが中心であったが、クラスの中には虫に興味がない子どももいた。そこで対象を虫に限定せず、子どもたちの気づき・発見を記録する「なんでも図鑑」とした。すると子どもたちは**「虫」「花」「葉っぱ」「木の実」「木」「地面に空いた謎の穴」など、様々なものの発見を楽しむようになり、のっばらで過ごす子どもたちがますます生き生き**としてきた。

②捕まえてあげる！

- ・Aさんは虫があまり得意ではなく、草や花などの自然物を見つけて図鑑に載せていた。しかし、周りの友だちの様子を見てある日、虫を捕まえることに挑戦することにしたようだった。シジミチョウを発見して捕まえようとしながらも、自分の手で捕まえるのを躊躇していた。すると**5歳児Bさんがそれに気づき、「私が捕まえてあげる！」と代わりにシジミチョウを手で捕まえてくれた**。2人の名前が記されることになり、Bさんは、誇らしげにそのページを眺め、**AさんはBさんへのあこがれの気持ちが高まった。それをきっかけにAさんは虫を捕まえるようになり、シジミチョウも自分の手で捕まえることができるようになった**。



③虫の名前をもっと知りたい！

・「虫を捕まえると、何の虫か調べるために虫メガネや図鑑を使って情報を得ようとする姿」が見られるようになった。しかし、捕まえたものの、名前が分からず「謎の虫」として「なんでも図鑑」に載せるケースもあった。後日「なんでも図鑑」を眺めていた子どもが「あ、これ知っているよ」と正確な虫の名前を教えてくれ、情報が更新されることもあった。**自分で発見し、捕まえた虫や自然物を載せるという喜びが、もっと知りたいという思いへとつながっていった。**2019年8月から始まった「なんでも図鑑」は2020年3月で3巻となり、2019年度の1年間で36種の生き物と20種の野草や自然物が掲載された。5歳児クラスとなっても更新されている。



【考察】 虫に興味がない子どもでも、自分で発見する喜びを大切にしてもらおうと始めた「なんでも図鑑」。このアイデアにより、図鑑を作成する過程で、自分の発見を嬉しそうに伝える姿や、友達と一緒に声を掛け合い、発見することを楽しむ姿が見られるようになった。虫だけでなく、周りの自然物へと目を向けるようになり、物事への関心が高まった。また、友達同士で虫の居場所の情報交換をしながら関わりを深め、共感する力が育ってきた。さらに、虫を探し出す力やチョウやトンボを素手で捕まえる時の集中力と瞬発力は目をみはるほどになった。

事例3：カマキリが生まれちゃった

4歳児・5歳児

- ・5月中旬、5歳児が散歩から持ち帰ったカマキリの卵が孵り、数十匹の赤ちゃんをのっばらに放す。初めて見る赤ちゃんカマキリの動きや速さに驚き、一気に興味をもった。それからずっと、のっばらで日常的に関わり、興味をもち続けていた。
- ・1月の下旬、12月から虫かごに入れていたカマキリの卵からカマキリが産まれていた。驚きと喜びの声があがり、すぐに観察が始まり、その勢いに見入っている。4歳児もすぐに聞きつけ集まってきた。**「まだ冬なのに」「部屋があったかすぎたんだよ」と5歳児が相談を始めた。「卵を移動させなきゃ」「寒いところがいいよ」「トイレがいいんじゃない？」「トイレはそんなに寒くないよ」「冷蔵庫は？」「そこは寒すぎる、赤ちゃん凍っちゃう」「扇風機をつけて、その下にずっと置いたらいいんじゃない？」「虫は外で暮らしているから、外がいいかも」と、子どもたちは口ぐちに自分の考えを皆に伝えた。**その後、子どもたちが相談し、残りの卵を外のテラスにおくことにした。
- ・5歳児Eさんが、図鑑で調べ、**赤ちゃんカマキリがアブラムシを食べることを4歳児にも知らせる。**早速4、5歳児がのっばらへ出て、カマキリの赤ちゃんのためのアブラムシ探しが始まった。**4歳児2人が落ち葉の裏に斑点がついているのを見つける。**「これ、アブラムシかな。フンか？」と言いながら、5歳児Fさんのもとへと持っていった。Fさんが顕微鏡を持ち出し、ピントを合わせると皆でのぞきこんだ。黒い斑点が、顕微鏡のデジタル画面に大きく映し出されると**「足がある、動いてる。これ、アブラムシだ」**と喜ぶ姿がある。黒い斑点とデジタルを交互に見ながら、「これ、絶対絶対アブラムシだ」と喜びすぐにカマキリの虫かごへと入れていた。



【考察】 園庭という身近な場所で年間を通してカマキリの生態を見ることができたのは貴重な体験であった。最初は扱い方が全く分からない状態であったが、のっばらで日常的にカマキリに触れ理解を深めていった。そしてそれぞれの変化や生態に対しての驚きや期待を日々積み重ね、さらなる知りたい意欲や関心へと広がっていった。カマキリの変化や卵を見守る事例にもあるように、子どもたちは観察力とその継続にさらに磨きをかけ、分からないことや予想外の生き物の生態に対して、子ども同士で意見を出す姿が見られるようになった。また、共通の場所であるのっばらにいつもカマキリがいたことで、お互いに聞きあったりする姿が見られ、自然に異年齢児のかかわりを築くことができた。

事例4：ハリガネムシって面白い

2歳児・4歳児

①ナゾの生き物

- ・のっばらでいつものように虫探しをしているとCさんが**「何か動いてる！」**と細長い針金のような形でゆっくりと動く生き物を発見する。その声に子どもたちが集まってきて**「ミミズじゃない？」「草？」「根っこ？」**とみんな考えていた。すると4歳児が**「これはハリガネムシだと思う」と**言う。

- 子どもも保育者も聞いたことのない名前に戸惑っていると、続けて「**図鑑で見たことがある。カマキリのお腹とかから出てくるんだって**」と教えてくれた。2歳児の子どもたちは近くにカマキリの死骸を見つけ、自分の目で確認したことで「**このカマキリからハリガネムシが出てきたのか？**」と4歳児が言っていることが分かったようだった。ハリガネムシという名前がわかり、Cさんが「触ってみたい」と言う。
- ハリガネムシがどんな生き物なのか分からなかったため、その時は触らずにペットボトルに水を入れて観察することにした。翌日、**触っても害がないことを確認できた**。子どもたちが集まって**触り始めると「固い」「なんかザラザラする」と感触を表現する**子どもがいる一方、触ることを少し怖がる子どももいた。友達が触っている様子を見て、自分もゆっくりと手を出し、「**触った！**」と嬉しそうな表情も見せた。



②何を食べるのかな？

- ペットボトルで観察していると「何食べるのかな？」とDさんが言った。その言葉を受けて保育者が周りにいた子どもたちにも問いかけると「**葉っぱかな？」「花じゃない？**」などと言う。そして葉っぱや草をペットボトルに入れることになった。しかし草を食べる様子はなく、時間がたってもほとんど動かない。「**食べてないね**」と少し残念そうにしていたが、「**じゃあカマキリかな？」「パンを食べるかな？**」と次々に考えてみる。翌日、用務職員から「**鯉節や金魚の餌を入れてみたらどうか**」という提案があり、早速入れてみると、直接食べる姿は見られなかった。しかし、**ハリガネムシが少し動いたのを見て「なんか動くようになったね」と子どもが気づく**。「もしかしたら食べたり水を飲んだりしているかもしれないね」と話すと、子どもたちは自分たちがハリガネムシの餌を発見した気持ちになり、嬉しそうな表情で「**餌をあげたい**」と言い出した。

③水を替えてあげたい！

- 金魚の餌をあげるようになって1週間後にFさんが「**水汚いから新しくしたい**」と言った。「元気になるかな？」「あっ、動いたよ！」「気持ちいいかな？」とみんなで水を替える様子に興味をもって見ていた。その後もしばらくハリガネムシを観察し、さらに興味が増していった。



④試したら動いた！

- ハリガネムシを見つけて2週間。ハリガネムシは縮こまって動かないことがほとんどであった。動くところを見たい子どもたちに、初日から興味をもって見ていたCさんが「**こうやったらよく動くよ**」とペットボトルを振ることを教えてくれる。子どもたちが早速試してみると、ハリガネムシが動き、「**ほんとだ」「すごい！**」と繰り返しやってみていた。Cさんは、その日から「**こうやったら(振ったら)動くんだよ**」と得意げにハリガネムシを見に来た保育者や友達に教えるようになった。

【考察】 今回の経験では、子どもたちはハリガネムシに出合い「**なんだろう？」「さわってみたい！**」と好奇心が湧いた。2歳児は興味を長く保つことは難しい。しかし、ハリガネムシが目で見ても分かりやすい変化や動きをするということが、子どもたちの興味を持続させ、子どもの気づきや思いをさらに引き出すことができたと思う。S児やR児のように興味をもって観察する子がいて、ペットボトルを転がす、振ってみるなど試すことで「**ペットボトルを振ったら動く**」という発見にもつながった。その疑問や気づきをみんなで共有して一緒に考えていくことで、「何食べるのかな」「水を替えたなら元気になるかな」など、2歳児なりに探究心が育まれていった。

のっばらグラム・のっばらだより

保護者用お知らせボードは「**のっばらグラム**」と名付け、子どもと「**のっばら**」に関する子どもの発見、つづやきをタイムリーに発信する機会としてエントランスに設置し、年間45回発信した。またA4サイズ両面にのっばらのできごとを報告した「**のっばらだより**」を保護者へ配布した。これは、子どもの育ちを保護者と共有するためのツールとなった。子どもたちも、保護者に受け止められて喜びを感じ、様々な発見が自信にもつながった。



「のっばらグラム」

カブトムシ 育ってます！

船橋西保育園で行った秋の遠足で神代植物公園周辺の原っぱでバッタを追いかけて遊んでいたときにみつけたひとつの切り株。何かがいそうな雰囲気があり、みんなで掘ってみると、立派なカブトムシの幼虫がたくさん出てきました。初めて幼虫を見た子どもも、大喜びしながら「**連れて帰りたい！」「面白い！**」ということになり、ここまで育ててきました。

意外に掘いた衣装ケースの中で育てていたことで、暖かかったのか、少し自然界よりは早く成長になったカブトムシたち。餌と水をきついでケースに入れていくと、わずか1週間ほどで白い卵を産み始めました。卵は日々増えていて、今では卵から孵化した小さな幼虫も元気な姿を見せています。この子たち（幼虫たち）がどうやって成長していくのか、ぜひみなさんも一緒に見守ってください。

「のっばらだより」

